

# 絵画修復家のアトリエから

加賀優記子 絵画修復家

昨年暮れから2月いっぱいまでは、アトリエに岡鹿之助の50号の作品が来ていました。

個人的に修復を始めて既に20年近い年月になりましたが、今までなかなかお目にかかれなかったのは、西洋ものでは例えばギユスターブ・モローやセザンヌなどの作品、日本ものではこの岡鹿之助の作品でしょうか。やっと初めてアトリエにモローの作品が来たときは、まるでアトリエの中に宝石があるみたいで、王女の像が描かれた黒い背景の小品が、自らキラキラ光を発しているようだったし、やはり修復歴18年目にしてはじめてきた小さなセザンヌの作品は、林檎がたった二個描かれているだけでも、畏れ多く、威厳に満ち溢れて存在していました。そ

つぶさに実物をこの目で見て検証したい、という思いがありました。(大学卒業後、フランスで色々なことを学んで、岡の技法書にも、有名なグザビエ・ド・ラングレの油彩画のための技法書などにも色々な過ちがあつて、どんな本でも頭ごなしには信じられないけど、なんて事が徐々に分かりだし、それでは自分はどうやって正しい技法の知識を得ようかと考

え始めた時代がありました……) 岡鹿之助という名前を聞くと、やはり第一に思い浮かべてしまうのは、技法書を書いた、「知」を持つて作品づくりをした人、ということでしょうか。

それはやみくもに買ってきた市販のキレガントな所作と知性を秘めて静かに控えめに座り込んでいる老人のようで、茶色い画面に沈んだ緑城の古城を描いた地味な色調の作品にかかわらず、アトリエの中を忙しく動き回る私の視線を必ず引っ張り込むのです。そして頑張って描いている風には見えないし、むしろ心もとない、といった風情の作品のつくりですが、やはり他の作品とは違う不思議なインパクトを有しています。

岡の作品は、やはり大学生の頃に読んで彼の書いた技法書を読んでいるので、つぶさに実物をこの目で見て検証したい、という思いがありました。(大学卒業後、フランスで色々なことを学んで、岡の技法書にも、有名なグザビエ・ド・ラングレの油彩画のための技法書などにも色々な過ちがあつて、どんな本でも頭ごなしには信じられないけど、なんて事が徐々に分かりだし、それでは自分はどうやって正しい技法の知識を得ようかと考

え始めた時代がありました……) 岡鹿之助という名前を聞くと、やはり第一に思い浮かべてしまうのは、技法書を書いた、「知」を持つて作品づくりをした人、ということでしょうか。

それはやみくもに買ってきた市販のキレガントな所作と知性を秘めて静かに控えめに座り込んでいる老人のようで、茶色い画面に沈んだ緑城の古城を描いた地味な色調の作品にかかわらず、アトリエの中を忙しく動き回る私の視線を必ず引っ張り込むのです。そして頑張って描いている風には見えないし、むしろ心もとない、といった風情の作品のつくりですが、やはり他の作品とは違う不思議なインパクトを有しています。

岡の作品は、やはり大学生の頃に読んで彼の書いた技法書を読んでいるので、つぶさに実物をこの目で見て検証したい、という思いがありました。(大学卒業後、フランスで色々なことを学んで、岡の技法書にも、有名なグザビエ・ド・ラングレの油彩画のための技法書などにも色々な過ちがあつて、どんな本でも頭ごなしには信じられないけど、なんて事が徐々に分かりだし、それでは自分はどうやって正しい技法の知識を得ようかと考

え始めた時代がありました……) 岡鹿之助という名前を聞くと、やはり第一に思い浮かべてしまうのは、技法書を書いた、「知」を持つて作品づくりをした人、ということでしょうか。

それはやみくもに買ってきた市販のキレガントな所作と知性を秘めて静かに控えめに座り込んでいる老人のようで、茶色い画面に沈んだ緑城の古城を描いた地味な色調の作品にかかわらず、アトリエの中を忙しく動き回る私の視線を必ず引っ張り込むのです。そして頑張って描いている風には見えないし、むしろ心もとない、といった風情の作品のつくりですが、やはり他の作品とは違う不思議なインパクトを有しています。

フランスでの私は、技法についての疑問は何でも解決してやろうという妙な執念を燃やして、いろいろな画材店をくまなく回って、トタン膠やチヨウザメ膠の溶解する一番いい方法を模索したり、これを処方して作品の制作実験をしたり、セヌリエ社や、イタリア、オランダまで行って、質のいいもの、珍しいもの、あらゆる顔料を買い漁っては数十万もの支払いに難儀したこともあります。紙や絹や麻やコットンにカゼインで、くるみ油で顔料を練ってなど、ありとあらゆる実験をした。思い出して今でも可笑しいのは、こういう古典技法を必死の思いで研究しようとしている連中は、パリには他にも大勢居て、彼らと当時私が「また貸し」状態で借りていた、14世紀の城の(ここには一時期モーツアルトが住んでいた)ので中庭には噴水と彼を記念したレリーフがあつたりした。私は一階の城の一部に住んでいた。現在ここはパリ市写真美術館になっている。(ただっ広くて真つ暗な地下室で、みんなで泣け無しのお金を出し合って、ホンモノで上物のラピスラズリの石を買ってきて、トンカチで叩いて何とかいい顔料を作る(テンペ

ラに適した不純物の少ない顔料の抽出は、チェンニーニの時代から試行錯誤されてきた難しい技術。)事に挑戦。みんなでおでこをくつつけて固唾を呑んでトンカチで叩いた。と、火花を出してそいつがすっ飛んでいって、地下室の何処かに行っちゃったからもう大変……なんて事を思い出して、ついニヤツとしてしまう。

みんながワイワイ、ガヤガヤ、あそここんなこと書いてあつたよ、とかいやいや、ここにこんな記述があるんだ、とか。辞書を片手にフランス語を訳して……。私のルーブルの師匠が、(彼は化学者なのでレベルが違うのだけど)、私の何十倍も書物で勉強をする人で、よくパリ中の本屋に連れて行かれては本を買う現場に立ち会つたり、買った本を私にも後で読んで置くように言われた。彼はパリ中の古本を扱う業者と顔見知りだった。

パリには、日本の神田のように、何世紀の何、という特別なジャンルのスペシャリストだという古本屋がずいぶん存在する。いい本が手に入ると連絡が入り、師匠はルーブルの仕事帰りに私を車に乗せたまま無言でそこに向かってしまうのだから、嫌が応にも私も勉強する羽目にな

つた、という感じだ。特に彼は17、18世紀からの古い文献から処方方を学び取ったり、比較研究することを多くした。時折、じろつと私をにらんでフン、と鼻を鳴らしながら無造作に私の目の前に古い茶褐色に変色した本を

突き出してお前にやる、と言ってくれた。(こういう本は高価で、5、6万するのはざらだった。)彼が私にくれた本の中には、18世紀の建築素材に関する文献があつて、この中にはチーズから取ったカゼインを石造りの建築物を接着する糊に使用していた処方が書かれていたりする。こうした本の中でも、有用なのはほんのわずかな数行の文であることが多い。だけれどこの数行でも新たな発見や理解が見つかる、エキサイトして大変面白い。

ただ困ったことにこうした資料は、巷にはそんなにヒットする本は少ないし、きつとすごいのは、イギリスやフランスの国立図書館などにある貸し出し禁止の本だと思つていた。いくらルーブルに居てもここにはなかなか立ち入ることが出来ない、がっかりしていたら、2000年になって、思いがけずドイツで研修することが決まり、ドイツの国立図書館には博物館所属の身分で潜入することが出来た!

中にはお宝がぞくぞく……。ずつと見たかったド・マイエルヌ手稿(王室付きの医者がルーベンスやヴァン・ダイクの技法をその当時にメモして遺したもの)や、修復の洗浄理論については、第一人者のヴォルバースなどの(これは近年のものはざらだった。)彼が私にくれた本の中には、18世紀の建築素材に関する文献があつて、この中にはチーズから取ったカゼインを石造りの建築物を接着する糊に使用していた処方が書かれていたりする。こうした本の中でも、有用なのはほんのわずかな数行の文であることが多い。だけれどこの数行でも新たな発見や理解が見つかる、エキサイトして大変面白い。

ただ困ったことにこうした資料は、巷にはそんなにヒットする本は少ないし、きつとすごいのは、イギリスやフランスの国立図書館などにある貸し出し禁止の本だと思つていた。いくらルーブルに居てもここにはなかなか立ち入ることが出来ない、がっかりしていたら、2000年になって、思いがけずドイツで研修することが決まり、ドイツの国立図書館には博物館所属の身分で潜入することが出来た!

中にはお宝がぞくぞく……。ずつと見たかったド・マイエルヌ手稿(王室付きの医者がルーベンスやヴァン・ダイクの技法をその当時にメモして遺したもの)や、修復の洗浄理論については、第一人者のヴォルバースなどの(これは近年のものはざらだった。)彼が私にくれた本の中には、18世紀の建築素材に関する文献があつて、この中にはチーズから取ったカゼインを石造りの建築物を接着する糊に使用していた処方が書かれていたりする。こうした本の中でも、有用なのはほんのわずかな数行の文であることが多い。だけれどこの数行でも新たな発見や理解が見つかる、エキサイトして大変面白い。

岡鹿之助 作品「古城」



かがゆきこ ● 絵画修復家、大学卒業後、絵画の古典技法を学ぶためにパリに留学。ルーブル美術館の絵画修復員を経て、現在は個人で修復工房を主宰。